

(日本書紀の)地名記事をそう肯定して読んだ上で、大和政権の始祖はほんとうに九州から大和へと進出したとみなす見解も出されている。

その1つが、**狗奴国東遷説**である。

『魏志』東夷伝倭人条(講談社学術文庫)によれば、狗奴国は国王・卑弥弓呼^{ひみこ}を擁し、その北にあって邪馬台国の女王・卑弥呼を盟主とする三十ヶ国連合と対峙していた。正始八年(248)狗奴国と邪馬台国とは戦闘状態に入り、卑弥呼は魏の支援をうけたものの、その戦いのさなかに死没した。邪馬台国連合内は混迷の度を深め、男王の擁立をめぐる調整がつかず、長く内紛が続いたという。それならば、**狗奴国が邪馬台国の混迷に乗じて滅ぼしてしまっておかしくない**。邪馬台国が筑紫地域にあるとすれば、その南にあった狗奴国は日向を含む九州地方南部あたりに位置していたはずである。つまり日向から出征したのは狗奴国の卑弥弓呼の後裔で、東征して全国を制覇したのちに、本拠を大和に移した。この大遠征の記憶がやがて神話的に縮約され、神武東征譚として伝承された。『古事記』『日本書紀』の東征伝承は、現実起きたこのときの記憶の反映だと解釈する。

<この文書は、「**生駒の神話**」(下記URLをクリック)に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>